

変革の力としての「一つの教会」

——福音が形成するエキエニズム——

舟 喜 信

聖霊は失敗の中に一致を、罪の中に一致を、恥の中に一致を、無力と絶望の中に一致をもたらされる。一致がないのは教会のメンバーが罪を責められることがないからである。

(M・ロイド・ジョーンズ)

一、制度によらぬ「一つの教会」

A 序論

B 「一つの教会」であること

C 「一つの教会」となること

D 「一つの教会」の展開

二、現代史のなかの「一つの教会」

A 歴史的検証の必要

B 「一つの教会」の見える表現

C 「一つの教会」が求める変革の方向

D 結び

制度によらぬ「一つの教会」

①「新約聖書には、教会の一体性がなんらかの外的組織や教会制度によって表現される、という考えを示すものはない。」G・E・ラッドのこの結論が正しければ、新約聖書においては教会が一つであるという事実は、その本質において組織・制度によらないものであることになる。この「制度によらぬ一つの教会」ということは単に制度を超えた教会ということではないであろう。制度を超えることは制度的な存在と一切かわらないことを意味し得るし、教会が制度・組織を生み出して来た歴史の現実を超えてしまうことになり得るからである。それは「一つの教会」の抽象化であり、非現実化に他ならない。さらにまた、制度によらないことは制度以前のもの、ということではない。なぜなら制度以前ということとは、まだ制度を必要とするようになる以前の段階の、特別な状況を意味するに過ぎないからである。

②「制度によらぬ一つの教会」は聖書の事実であり、歴史の事実である。ラッドの以下の表現は、初期の教会についての一つの描写であるよりは教会の定義として受けとめられる。

教会は互いを結びつける外的な、形をとまなつたいかなる組織も持たないままに、アンテオケからローマまで、地中海世界に散在した信者の多くの群から成っていた。

③いかなる組織ももたないままでということとは、多くの群を結びつける組織なしにということと、散在していた群の一つひとつがなんの組織ももたなかったということとを必ずしも意味しない。むしろやがて広くかつ強固に信者たちを

結びつけて行く制度や組織の萌芽は、初めからのものであるはずである。このような現実にもかかわらず存在している

「制度によらない一つの教会」は、歴史の事実であると同時に歴史を通じての教会の事実であった。このような意味での「制度によらない一つの教会」(以下「一つの教会」という)は神御自身のみわざであり、教会の歴史に先行的であるとともに恒久的な事実である。それは巨大組織化した教会によって置き換えられることはなかったし、教派的に多様化した教会によって破られることもなかった。それは歴史を通じて教会が教会として存在することに内在する事実であり、教会が教会として正常に機能するための一つの原理であった。それはまた教会を通しての神のみわざに用いられるものたちの、信仰による行動の枠組みであった。この同じ「一つの教会」の事実が現代の教会とその営みのために決しておろそかにされてはならない前提であることは強調されてよいであろう。

教会が聖書の原則に忠実であるということ

教会が聖書に忠実であるということは具体的には何を意味するのであろうか。みことばが正しく説教される。教理が正しく教えられる。礼典が正しく執行される。他に教会政治の形態や運営、それにリーダーシップの質も問われなければならぬだろう。しかしこのようなことは別に、新約の教会があつた時代のもろもろの社会的・政治的現実の中で、自らをどのように考え、どのような具体的なあり方をしてきたかを学ばなければならない。教会の制度を学ぶにしても現在の状況にあわせてその形を受容するのではなく、聖書の中に生きている教会そのものの現実を学ばなければならないと思われる。現代の教会が「聖書的」であろうとするとき、新約聖書の教会そのものに戻ることはできない。教会政治についても新約聖書そのものはいずれの形態が正しいか決定的なものを示してはいない^⑤。教会の拡大する性格、歴史的展開の本質は、教会のあり方を形としてのそれよりも、教会としての存在そのもののあり方において問う。そしてここでの原則はパウロの時代も現代も異なったものを求めはしない。

このような視点からパウロの教会を改めて見るとききわだつて認められることが、教会が一つであるという事実と、教会が一つであるという事実の理解が教会のあり方、その働きの内容を決定するほどの意味を持つていたことである。このことは教会がその考え方と行動においていつも一致していたということではない。分裂もあり対立も矛盾もあった。しかしそのすべてが「一つの教会」が一つであることの実を結ぶための苦悩であり、過程であった。一致を訴えるとき、それは一致を生みだすためでなく、もともと一つであるものが、それにふさわしく整えられるためであった。地域の教会が一つでなければならぬということより、教会が一つであることがその教会のあり方を決めなければならないということを意味しているようである。

パウロの強調した教会のあり方は、社会にあつて、世界に向かつて教会として内にも外にも機能する教会ではなかったか。「一つの教会」は単なる理念ではなく、教会が教会として機能するために不可欠の理解であった。教会が聖書的事実であることは教会のあり方のすべてにおいて問われ、理解され、また生きなければならぬ事実である。

「一つの教会」であること

パウロはコリントの教会の人たちのことを「私たちの主イエス・キリストの御名を、至るところで呼び求めているすべての人々とともに、聖徒として召され」た人たちと呼び掛けている。こうした呼び掛けがキリスト者たちに、教会が何であり、自分たちがどのような存在であるかを意識させ、その自覚を深めさせたことは確かであろう。「使徒時代のキリスト者の群は地域的な教会として一つひとつが独自の、強い結束をもっていた。同時にそれぞれがさらに大きな運動体に属しているということを自覚していた」^⑥のである。地域の群にありながら、同時に「いたるところ」

にいる人たちと同じ群につながっているという理解そのものが、どの使徒にもまぎって「最も効果的な働きをした宣教師（ハルナック）」であったという。キリスト者のこの二重の立場の理解が、初期の教会の拡大に果たした役割は、一般の理解をはるかに超えたものであつたらう。

パウロはエクレスシアという言葉の用い方によって、彼の理解する教会の意味を明らかにしている。同じエクレスシアが家の教会（ローマ一六・五など）、一地域のキリスト者全体（ガラテヤ一・二二など）、さらにすべてのキリスト者を含む全体（コロサイ一・一八など）の表題として用いられる狭い地域内の群も、もっと大きな広がりとしても、また全体としてもエクレスシアはエクレスシアなのである。しかも小さな群を地域教会とするなら、それはそのまま、より大きな教会の一部というわけではない。「一つの教会」はすべての地域教会の総和を意味しない。それがむしろどんなに小さくても、その地に表現された「一つの教会」としての性格をもっていたことが重大であらう。一つひとつの地域教会がその地で教会全体を代表するのである。このことは「キリストのすべての力が一つひとつの教会の会衆のものとされうること」、「地域教会は普遍的教会が全体として世界で機能するように、その地で機能する」ことを意味する。使徒の教会において、教会の一体性の理解が決して抽象的なものでなく、むしろ極めて現実に教会のあり方そのものに作用していたことは確かであらう。

「一つの教会」となること

「一つの教会」であることは地域の群がもろもろの相違をもっているとしても全体としてひとつである、ということにとどまらない。教会が一つであるのは福音のゆえだからである。福音は和解の福音であり、そのまま「一つにする力」である。それゆえ「一つの教会」は教会の状態の表現であるよりは、一つにする力の働く場であるといえるのではな

いか。「一つの教会」そのものが聖霊の働きである。それは別々のものを一つにするだけでなく、一つにされたものを一つのものとして実を結ばせる力である。それは一つであることを、よりよく表現させる力とも考えられる。多くの人が一つとされた一地域教会は、さらにその内においてまた外に向かって一つになる働きを続ける。パウロの教会が経験した、内部的な分裂の癒しの働きは、外への和解の福音による分裂の癒しのわざとは平行的である。うちなる聖別のわざと外への宣教のわざとは、一つとする和解の福音の方法であり実であらう。地域教会をふくめあらゆるレベルでの教会の一致は、理解されるべきことであるだけでなく、経験されなければならないことであらう。「一つの教会」が教会の状態を表わす静止した考え方でないことは、教会をキリストのからだである有機体として理解するとき自明である。しかし生きて働きの教会は、理念としてより、具体的な事実としてとらえられなければならない。「一つの教会」は本来、極めてダイナミックな概念である。そのダイナミズムは出来上がってしまったものの中にではなく、形成され、変革され続けるものの中にあらわされるものである。そして一地域教会における福音による変革のわざは、一つの和解の福音のゆえにその地の宣教のわざと平行するし、より広い教会での変革のわざは、より広い世界でのそれと平行するよう思われる。使徒の教会のもろもろの問題の中には、一つであるための痛みが少なくない。そしてこれらの問題に対応するパウロの愛と熱心は、同じパウロの世界宣教の熱心と決して別のもではない。多様な社会層の人たちが一つのものとされたパウロの教会において「一つとなる教会」のわざは決して人びとの未熟を示すものではなかった。むしろ和解の福音によって変革され続けなければならない「世の現実」を示すものであった。分裂のいやしの努力こそ、「一つの教会」が同時に「一つとなる教会」であることを知るもの、福音に仕えるゆえの最優先の責任ではなかったか。

るといふ^⑤。かつては圧倒的に貧しい人たちの集団と理解されていた使徒の教会が、現在ではその時代の教会そのものの断面を見るような構成であったとされている^⑥。ほとんどの異なった階層の人々が混在するということで、その社会の特定の階層による他の組織や団体と対照的であった。このことは福音の宣教があつてこそその問題であり、他の方法では、一つとされる可能性さえないところにはじめられた、和解の福音のわざなのであつた。救われても、人々の違いはしばしば対立となり紛争となつたが、そのすべては一つのものとしてされたゆえであり、キリストをかしらとするからだにながれたからである。一つであることの具体化の経験であつた。

W・A・ミークスは新約聖書に記されているパウロの教会と、そのおかれた状況について詳細な社会学的な分析をしている。彼によると当時の社会の基準でいう最上層と最下層の人々が教会につながつていたとする根拠はない、しかし教会はその中間の広汎な、また多様な階層の人々からなる混成集団であつたという。奴隷がいた。自由人である職人がいた。職人たちは小商人とともにかなり目立った存在であつた。家を持ち、奴隷を使い、旅行する余裕のある裕福な人々もいた。奴隷か地位あるひとかわからないながらカエサルの家もいた。裕福な婦人たち、ユダヤ人、またユダヤ人の宗教とかかわつて一般社会において微妙な立場の異邦人もいた。しかもこれらの人の間にはその地位をはるかに越えるような働きをしているものが多いのが全体としての特長であつたといふ^⑦。

多様でしかも進取の気性の人たちが多かつたということになれば、教会の内部で問題が少なくなつたことも信仰の未成熟によつてのみ説明されるべきではないであらう。きびしい階級差別の社会での問題が、教会の中でしばしば再現されても不思議でなかつたと思われる。しかし重要なのは一般社会では問題にならないことが、社会で問題になるという場合である。第一コリント一・一七以下で、パウロはコリント教会の分裂的な状態を悟つてゐる。それは家を所有していた人たち、つまり比較的豊かな人たちと貧しい人たちの間のことが原因となつての分裂であつた。同じ

階級の人々だけが交わる一般社会では起こらないことが、異なつた階級のいりまじる教会であるからこそ起こるといふ状態であつたのであらう。パウロが教会の分裂状態を深く心に受けとめてゐるのは、分裂しては教会が立ち行かないといふ単純なことではなかつた。たまたまの分裂ではなく、もともと別であるものが一つにされることによる緊張状態の現実なのである。別々のものを一つにした福音は、一つにされたもの間に一致のわざ、和解と調和のわざをすすめる。教会の中の分裂のいやしは、新しい神の国の原理による歩みの進展であつた。主にあるものの一一致への和解は、教会がおかれてゐる社会そのものの対立、分裂、差別のいやしの方法であり、変革の力であつた。地域教会の中での和解のダイナミズムは、そのまま社会の変革のための教会存在の理由なのである。制度によらない「一つの教会」は、教会が急速に拡大し、組織化され、多様な在り方をするようになって必要とされる教会の一致とは別のことである。それは教会に内在する一致であり、教会が教会であるゆえの本来の性格である。それはまた社会形成の原理である。教会は「一つである教会」の中でしか形成されない。「一つである教会」の意識なしに教会は正常に教会であることができない。「ひとつである教会」は、教会として、また教会の中でのあり方を決める基本概念としてみることが示している真理であると信じる。教会はその働きにおいて聖書の原理に忠実であるために「一つである」ことを無視も軽視もできない。

「一つの教会」の展開

パウロにおける教会は、地域教会のレベルでも、多くの教会をつらぬいての交わりのレベルでも同じように親しい。少なくともその交わりの質がその広がりと共にうすれてよい性格のものではなかつた。第一コリントの末尾でパウロは「アジアの諸教会がよろしくとっています……すべての兄弟があなたがたによろしくとっています。」と書

き、さらにコリントの人々に対し「聖なるくちづけをもって、互いにあいさつを交わしなさい」と求めている。ミークスはこのことに言及して、地域の教会で経験される交わりのもつとも親密な表現は儀礼的な聖なる口づけであるが、パウロは地域をはるかに越えた広い交わりを心にとめるといふ文脈で、この聖なる口づけをするように求めている。ここでの表現は儀礼のことばであるとともに、親しい個人的なかかわりでのことばであるとミークスは説明している。^④

パウロが指導したキリスト者の群が、エルサレムの貧しい兄弟たちのために献げるとき、それは決して見知らぬ人たちの苦しみを少しでもやわらげるための、義務感とか同情心とかによるものではない。「それらの群がエルサレムの会衆と一体であること」のゆえであった。つまり広い地域に散在していても教会が一つであるという事実は理想や憧れではない。それはそれぞれの群れが何を考え、どのように行動するかを決める積極的な力であった。この意味で「一つの教会」は現実そのものであり、体験されるべきことであった。

このことは教会の拡がりや文字どおり世界大となり、制度や組織の可視的な一致と教会の一致が同じことのように考えられる状況となっても、その本質において変わるべきことではなかった。教会一致の外的表現は信じるものにとつて「一致の事実に参加する中で、また参加することによつてずつと有効に表現される現実への証でしかない。」つまり教会の一致は組織や制度、またそのあり方などによつて可視的に表現されるにしても、真の一致の事実はむしろ一致の事実に参加していること、一つの教会としての存在と、その働きの中に生きることによつてこそ知るべきことであるといつてよいであろう。広い教会についてのこのことは一つの地域教会についても云えることであろう。

「一つの教会」はこの世に対しても生きていた。教会がこの世との相違を強く意識しそのために、内部で固まっておとの接点を失うようなものとならなかつたことである。教会はあくまでもこの世にあり、この世に手を延ばし続ける存在であった。信者であるキリスト者は信者でない配偶者がいっしょに居ることを承知している間は離婚してはいけなかつた。^⑤ 信者でないものが信者によつて聖められているのであつた。^⑥ ここで教会の外にいるものが教会員との関係において、教会につながりあるものとして、はっきり位置づけられている。つまり教会は教会の外と生き生きとしたかかわりをもちつつ、「一つであること」を外に広げる作用をつねに続けているのである。信仰のないものに招待されたときのこと。^⑦ 信者でないものに開放された集会のこと、^⑧ さらに「聖徒が世界をなまなく」^⑨「ことへの言及に、「一つの教会」がこの世に生き、この世に対して生きている事実が鮮やかに示されている。^⑩ 神との和解によつてキリストのからだにつながれたものたちは、同じ和解によつて、同じからだにつながらなければならない他のものたちとの、具体的な接点であり続けたのである。

現代史のなかの「一つの教会」

歴史的検証の必要

パウロの制度によらない「一つの教会」が教会の理解であつただけでなく、教会形成や行動の原理であつたとすれば、この「一つの教会」は後の歴史においてどのように受けとめられたのであろうか。形成の力、変革の力としての「一つの教会」があくまで和解の福音によることを中心に検証される必要があろう。

ルターには新しい教会を創設する意識はなかつたといふ。「彼の思ひはそこにある教会に仕えるといふことで、その教会は一つの、聖なる教会」^⑪であつた。ルターにとつて教会が「そこにある教会」であつたことは、それまでの教会の誤りの是正をもとめるものとしても当然であつたらう。しかし「そこにある教会」はもろもろのけがれとあやま

ちにもかかわらず聖なる教会ではない。異物や過ちの存在をゆるしつつ、そこにきよめる神のみわざが行われるゆえにこそそこにある聖なる教会といえるのであろう。そこで意識されているのは組織体としての教会よりキリストの生きて働くからだとしての教会である。教会はみことばによってきよめられなければならないだけでなく、みことばによってきよめるものでなければならぬ。「そこにある教会」は、どんな過誤があっても教会は教会という状態のことではない。それはむしろみわざが行われる場にある教会なのではないか。

ルターは信仰義認、つまり和解の福音の原理の復元によって、パウロの教会の「一つの教会」の原理に帰ったと云えるのではないだろうか。宗教改革が近代の教会分裂、教派主義の出発点であるといわれるにもかかわらず、それはまぎれもなく一致の原理の回復であったと云える。

ルターがみことばへの従順により、摂理によって結果的に脱出することとなったローマ教会は、その組織、制度によって教会の継続性の地上的な枠組みの一つとして機能して来た。またそれが福音の継承と無縁でなかったことも事実であろう。しかしそのことによって初代教会の「一つの教会」との同一性の維持を主張することはできない。もろもろの教會的出来事にもかかわらず宗教改革に先行する時代は、和解の福音による「一つの教会」の可見性が、極限まで狭められていた期間といえるであろう。

もしルターの信仰義認がパウロの教会における「一つの教会」の機能的原理、和解の福音の回復であったとすれば、分派的と説明される近代教会史の現実はどのように理解されるのであろうか。和解の福音の変形、喪失による一致の形骸化は、宗教改革以前とその背景こそ異にしていても、実質においては近代の問題でもある。最近の福音主義の福音のわい小化も別の意味で一致の形骸化を生み出した。

しかし、いまこの時点において教会史を全体として展望するとき、近代の教派主義は中世までの教会のあり方は是正のプロセスとして、積極的に位置づけられなければならないのではないか。

地上の教会はその自己理解と、自らのおかれた状況に依拠して、それぞれの形態を生み出して来た。それは主がみわざの完成への歴史のプロセスとして、それぞれの時代に許容しておられる事実であろう。宗教改革とその後における教会のあり方の多様性は、基本的に一つのものであるべき教会に対立しての試みではない。それは中世的教会の是正であり、新しい歴史的现实への対応でもあった。時に教会のある面が断片的に、ラディカルに強調されることによる明らかな突出、アンバランスが見られたにしても、全体としての地上の教会の新しい活力の発現であった。

しかし、このことが悲惨な分裂としてでなく有効な歴史のプロセスとしてとらえられるのは、いま教派主義そのものが是正の対象として強く意識されるようになったからである。それは宗教改革後の四百数十年を一続きの時代として、全歴史的な文脈の中で改めて問う作業による認識である。

マクロの視点から考えると、宗教改革を起点とする近代教派主義の多様性は、和解の福音の共有のゆえに、使徒の教会の「一つの教会」における多様性とアナロジカルであるように思われる。使徒時代以後の歴史における教会の外的拡がりには、新約聖書の教会の比ではない。パウロの教会の外的あり方、制度、組織などがそのまま継承されることはありえなかった。教会の多様性も当然その種類において、スケールにおいてすべて全く別のものである。しかし制度によらない「一つの教会」は時代をこえての真実である。近代の教派主義は制度に関する限り、教会の外的側面のみを見る限り、極めて分派的であることに間違いはない。しかし制度によらぬ「一つの教会」の観点からはまさしくその中の多様性以外の何物でもない、近代の教会は永い年月にわたってこの多様性の豊かさを味わって来た。しかしその豊かさは本来「一つの教会」の中にあるものとしてである。またその自覚においてもっとも有効に働く多様性なのではないか。